

馬籠宿～妻籠宿～南木曾駅 11.5km を歩く

11月27日やっとかめにいつもの4人で中山道の木曾路を歩きました。11月は行事も多くなかなか予定が組めませんでした。できれば木曾路の紅葉も楽しめたいと、お天気を確認してこの日なら大丈夫という27日に決めました。

見分けが難しい木曾五木

先回は馬籠宿から落合宿を経て中津川宿まで歩きましたが、今回は馬籠宿をスタートして木曾路を歩き妻籠宿へ。その先は最寄駅の南木曾駅まで歩くコース。距離はそこそこであるものの、馬籠峠を越えて行くことと、さらに先回も経験したように平坦な地形ではなく、そこは島崎藤村の小説で知られるように「木曾路はすべて山の中である」。ちょっとした移動も小さな山を一つ越えなければ行くことはできない。そのため常にアップダウンの連続であることを覚悟しないとイケない。

東浦駅 7:01 の列車に乗り込み中津川駅着 9:01、丁度2時間で到着し 9:10 の馬籠行バスに乗る。国道19号を離れ石組の残る段々畑を見ながら進み、神坂小中学校前を通ると馬籠宿に到着する。9:40 でまだ人はまばらであったが、すでに観光客が散策している。先回見学した藤村記念館まで行き、いよいよここからが今日のスタートである。



朝の馬籠宿



木曾五木の見本

歩き始めると木曾五木の説明用に苗木が並んで植えられ、名札がつけられている。し

かし、私の背丈ほどの苗木は一つを除いてみな同じような葉っぱをしている。ひのき、サワラ、あすなろ、ねずこ、こうやまきの五種類だが、この内こうやまき以外はみな「ヒノキ科」である。こうやまきだけは葉っぱが松葉みたいに細く伸びた葉をしており、すぐに見分けがつくが他の物は葉がみな同じで見分けがつかない。少し調べてみると、こうやまきには松と同じ松ぼっくりができる、そして、この五木の特徴はひのきは家具類に、サワラは桶類に、ねずこは建具に、あすなろは建築用に、そして、こうやまきは水湿に耐えることから風呂場内に使われる。代表例として旅館のお風呂に立派な木の風呂桶を見ることがある。

小牧長久手の戦いから名がついた「陣場」

馬籠の名物は藤村も愛した①栗こわめし②五平餅③信州そばといわれるが、その先の大黒屋は「夜明け前」では伏見屋として登場し、且、栗おこわが知られている。「初恋」のモデルお冬さんの生家でもある。そして、脇本陣資料館を過ぎると大通りにぶつかり、陣場のバス停に出る。



高札場



見晴らし台から見る恵那山

正面には立派なそば屋「恵盛庵」があり、傍らに「中山道」の大きな石柱が立っている。そのすぐ先の右手に高札が立っている、木曾代官により掲げられた正徳元年の毒薬・キリシタン禁制、明和7年の徒党禁止など6枚の高札が復元されている。この「陣場」というのは小牧長久手の戦い(天正12年・1584)のとき徳川方の保科・菅沼・諏訪の三武将が、馬籠城を攻めるためここに陣をしいたのでこの名がついたという。馬籠城を守っていたのは島崎重道(藤村の祖)で、徳川の三武将に攻められ妻籠城に逃げたため

戦火をまぬかれた。その後に島崎重道が馬籠を開いたと言われている。

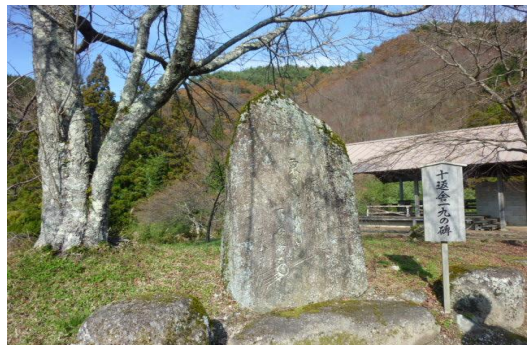
高札場から目と鼻の先に見晴らし台が整備されている、「夜明け前」で馬籠の象徴的な風景として描かれた恵那山を望む展望台だ。かなりの広さがありいくつかの石碑がある、その中に越県合併の碑が中央に置かれていた。周りを見渡すと、かなたには恵那山の雄姿が横たわる馬籠の風景が広がっていた。説明では特に夕陽がたまらなく美しいとある。

文学散歩の道を馬籠峠へ

そこから 20 分も行くと石垣を積んだ段々畑の横を通る、山道に赤いモミジの葉が敷き詰められ、そこだけ真っ赤に紅葉したモミジがとてもきれいだった。その赤いモミジの葉を踏みしめながら進むと、前方に水車塚がある。パンフレットによると明治 37 年 7 月の水害で、ここにあった民家が一瞬にして押し流され一家 4 人が亡くなった。難を逃れた家族の一人が後に供養のため島崎藤村に碑文を依頼して建てたものという。隣には熊よけの鐘が設置され鐘を鳴らしてくださいとある、熊がでてくれば困るので二度三度鳴らした。そこから 10 分程行くと民家があり、庭先に落花生と懐かしいもきり(ふかした薩摩イモをスライスしたもの)が干してあった。また道沿いではふかしたイモをザルに入れて、100 円の値札とともに置かれていた。ワンコインという意味と思うが少し高いと感じたし、そんなに食べたいとも思わなかったので素通りした。



段々畑とモミジ



十辺舎一九の碑

そのすぐ先にエノキと思われる大きな木の下に十辺舎一九の立派な碑があり、オープンデッキの休憩場までであった。まだここまで小一時間しか経ていないが、上り坂ばかり

なのでちょっとお疲れモード。石垣に腰をおろして一休みした、この碑には「渋皮の むけし女は見えねども 栗のこわめし ここの名物」と刻まれており、十辺舎一九が文政2年(1819)に木曾路を旅して「岐蘇街道膝栗毛」の馬籠のくだりで、この狂歌を詠んだもの。

休憩して10分も歩くととても大きな家が現れた、2階の窓辺には干し柿がつるしてあるのが見える。玄関で表札を見ると「今井仁郎」とある、パンフレットには江戸時代牛方と呼ばれる民間輸送機関の組頭を務めた家という。島崎藤村の「夜明け前」にも登場しており、かつての牛方組頭としての規模と格式を備えた貴重な建物で、どっしりとした風格のある建物だ。そこには伝統的重要建造物のプレートが掛けられていた。



牛方組頭の家



馬籠峠にて

さらに10分ほど上ると標高801mの馬籠峠に到着した、正岡子規の「白雲や 青葉若葉の 三十里」の句碑があるのだが気がつかなかった。以前は茶屋があり自販機も置かれていたようだが、今は何もなくさびしい限りだ。そこにはバス停もあり南木曾町の地域バスが一日5本運行されている。峠とはいえ見晴らしは利かない、案内地図を見て記念の写真を撮ってすぐ先に進むことにした。

立て場茶屋と白木改番所があった一石栃(いちこくとち)

峠からは下りなので気分的に違う、12分程行くと家が現れた。入口に「いちこくお休み所」の看板と、木曾街道つえ焼印所の札もあった。さらに立て場茶屋の説明板があり、ここ一石栃(いちこくとち)は妻籠宿と馬籠宿の間に位置し、往時は7軒ほどの家があったが、今ではこの牧野家一軒だけになっていると記されている。そし

て、すぐ目と鼻の先には「一石柘白木改番所跡」の看板があり、ここは明治2年まで木曾五木をはじめとする伐採禁止木の出荷統制が行われていました。少し広場があって柵で囲われており、かなり大きなしだれ桜が見えた。パンフレットではしだれ桜が咲き誇る写真も載っているが、その隣に子安観音の案内板もある。昔この付近に住む者は難産しないと言われており、信仰の対象として子安観音が祀られていました。現在も安産祈願に多くの人を訪れると言います。山あいには咲くしだれ桜はきっと素晴らしいだろうと想像しながら、帰りの電車の時間も気になるし、安産のお参りも縁があるわけでもないもので先に進みました。



立て場茶屋と一石柘白木改番所跡

5分も行くと大きなサワラの木があり立派な説明板があった。このサワラは樹齢300年幹回り5.5m 樹高41mあり、この一本で風呂桶が300個作れると記されている。そして、下枝が立ちあがって特異な枝ぶりを「かもいぎ(神居木)」と言ひ、昔から山の神(または天狗)が腰かけて休む場所と信じられていたそう。そのため、この木を傷つけたり切ったりすると、たちまちたたりがあると信じられていた。

そのすぐ先に今度は「サワラの合体木」という説明板が、何かと見てみると「対岸のサワラは合体木です」とある。説明はこうだ...①1716年伐採した切り株に苗木を2本植えました②苗木は成長して1863年から一本の木になっていきます③2009年～合体木となり成長を続けています。というもので、間隔をあけずに植えると合体するらしい。対岸のサワラを眺めて見るが、何がどう違うのかはさっぱり分からない。要は見ただけでは何も分からないので、ふうんとうなずくしかない。

「倉科祖霊社」と中山道唯一の「牛頭観音」

合体木の説明板から少し行くと中山道の道標と、この辺りの国有林の説明板があった。中山道の東側一帯は木曾森林管理署南木曾管内の南蘭(あららぎ)国有林だという。この中山道沿いの男埴(おたる)山一帯は木曾五木が生い茂り、江戸の昔から大切に守られてきたという。国有林の入口から分岐して男滝・女滝を見るため、山道を上り下りしながら歩いた。この滝は吉川英治の小説「宮本武蔵」の舞台として登場させた滝だと言うが、読んだことはない。しかし、思いのほか距離があってなかなか到着しない。やっと近くの説明板のある場所までたどりついたものの、そこから今度はかなり引き返す位置にあることが分かったのであきらめて小休憩。

街道に戻り、ひのきやサワラの森を抜けて山里の道へ出るとなによりやらの祠が立っている。説明板には「倉科祖霊社」とあり、松本城主小笠原貞慶の重臣倉科七郎左衛門の霊が祀られている。倉科七郎左衛門は主人の命を受けて大阪の豊臣秀吉のもとに使いに行き、その帰りに馬籠峠でこの地の土豪たちの襲撃を受け、従者三十余名とともに討ち死にした。この「倉科祖霊社」も近在の人たちがお祀りしているのだろうか、道より少し高い畑の端にある祠は、地元にあるお地蔵さんの祠くらいの大きさだが、板で囲うのではなく格子で囲まれていた。

少し先に2,3軒の民家があり軒先には干し柿がつるされている、集落があるかと思ったがその先はまた林の中へ続いていた。石畳の急な坂を下っていくと牛頭観音があった、石の多い急な坂道を重い荷物を運ぶために使われた牛たちの霊を祀ったものだ。馬頭観音はよく見られるが、この牛頭観音は珍しく中山道唯一のものだという。



倉科祖霊社



すてきな山里の風景

坂を下ると蘭(あららぎ)川沿いに民家があり、冬の暖房に使う薪が屋根だけの小屋にうず高く積まれていた。このような眺めはとても絵になる風景で、私の大好きな構図な

ので数回シャッターを押した。その先に中山道庚申塚や馬頭観音がある、実はここ「大妻籠一里塚跡」である。しかし、塚の跡はなくなっている。塚の前で街道は左に分岐するが、少し下り坂に沿って蔵が建っていた。その白い漆喰の蔵に何とスズメバチの巣が三つもぶらさがっているのに驚いた。隣の畑で作業する人がいたが、スズメバチは大丈夫なのかな？ 人ごとながら心配になる。

イワナの養殖池と「うだつの家」

蔵を後に少し行くと家並が見え一つの説明板があった、そこには「県宝藤原家住宅」とある。県内民家で最も古いクラスで建築は17世紀までさかのぼるとあり、この坂を登った上平にある。昭和53年に県宝に指定され昭和60年・61年に解体復元工事がなされ往時の姿がよみがえった、と記されている。でも、坂を登るのは遠慮して寄らずに進むと、マスかイワナとおもわれる魚の養殖池が並んでいる。覗き込んで見ると大きな魚もたくさんいるし、小さな魚ばかりの池もある。先ほどの川の水量は豊かできれいな水がながれていたが、その水を利用して川魚の養殖をしているのはうなずける。魚体の斑点からマスのように思うのだが、その先には「イワナの塩焼き」というノボリバタがはためいていた。それに、そこからはいずれも立派なうだつのあがる家並があった。3軒だけだがとても立派なもので、こんな山の中なのにと驚いた。



イワナの養殖池



うだつの家

そこからすぐに「大妻籠」の案内板があらわれる、大妻籠は妻籠の奥座敷といわれ立て場としてにぎわったところ。さきほどの、うだつのある家あたりも大妻籠の集落である。川を渡ると妻籠宿までの地図とホテルの里の案内板もあった。これだけきれいな水

の流れがある川ならホテルがいても何の不思議もない。すぐ前には大きな家があり、手打ちそば・五平餅の看板がある。すでに 12 時 10 分だがここは我慢して、妻籠宿まで行ってお昼にすることに。

宿場の入口にあった飯田街道は付け替えられ移動した

さらに数分歩くと再び蘭川を渡る、橋からの眺めはよく遠くの山の紅葉した景色が素晴らしい。橋を渡りきると右手の民家の庭らしき場所に大きな石柱が立っている。石柱道標で町の史跡に指定されている、妻籠は中山道と飯田街道との分岐点として栄えたところで、この道標は明治 14 年に国道開通を祝い、飯田・近江・地元の商人によって建てられたもので、高さ 3m あまりの大石柱。中山道と飯田街道がそれぞれ刻まれている。



そこから 5・6 分も行くと町の駐車場がある、その脇を通り国道 256 号を越えて川沿いの道を進み妻籠の宿場に入っていく。すると対岸になにやらオレンジ色の木の実が枝ごとにかくさんぶらさがっているような木があった。色と枝ぶり?が珍しいのでひととき目を引くが、それが何なのか? 誰も分からなかった。これまでどんな植物に出会っても、これは〇〇と応えてくれた友の細君も首をかしげるばかり...



その先では藁で作った馬が飾られている、木曾馬ということかなと思った。後で調べるとわら細工のお土産店だった。屋根が瓦ではない家の店先にベンチが置かれ、ひととき目立つ黄色のフォックスフェイスが籠に入れて飾られ、落ち着いた宿場の風情が感じられた。すると今度は縦長で上部がアールになった窓のある建物が現れ、「妻籠発電所」の看板が掛けられている。これも歴史的な建物のようにある、その発電所の向かいに小さな祠と地藏さんがあった。隣に説明板がありそれによると、この辺りは尾又地区で木曾路から伊奈道が分岐していたところで、右手の沢沿いの竹やぶの中に、今も道跡をたどることができる。宝暦年間(1760 頃)に飯田(・伊奈)

によると、この辺りは尾又地区で木曾路から伊奈道が分岐していたところで、右手の沢沿いの竹やぶの中に、今も道跡をたどることができる。宝暦年間(1760 頃)に飯田(・伊奈)

街道が付け替えられ、ここから 600m 南の橋場に追分(分岐点)が移動したという。



妻籠発電所



おしゃごじさま

もう一つの説明は「おしゃごじさま」で、御左口(ミサグチ)神を祀る。古代からの土俗信仰の神様で土地精霊神、酒神など諸説がある謎の神様と言われているそうだ。小さな祠が「おしゃごじさま」で、東浦にある「おしゃぐじさん」と同じようなものだろう。お地藏さんはここから分かれる飯田街道の旅の安全をお祈りしたものに違いない。そんな話をしながら行くと、昔風の屋並みが目に飛び込んできた。

4 5 年かけて復元した妻籠宿

説明板によるとここ寺下地区の復元保存工事は、全国でも初めての集落保存工事だと言う。長野県の明治 100 年記念事業として、昭和 43 年から 45 年にかけて 26 戸の解体復元工事を実施した。これにより江戸時代の面影をそのまま残すことができ、全国に注目されるようになり、昭和 51 年国の第一号重要伝統的建造物群保存地区に選定された。

街道の両側に続く家並みを見て一つ気がついたのは、樋が木製だったことだ。江戸時代の家だから当然なのだが、それがとても新鮮に映った。ここまできたらさすがに観光客がたくさん散策している、顔立ちでは気がつかなかったが外国の人も多い。韓国の人かと思ったが、そうではなく中国人のようだ。宿場にほぼ並行するように国道 256 号線が通っており、そこに町営の駐車場がある、それもバス専用と普通車用の二つが整備されている。その駐車場から団体のお客さんがぞろぞろ宿場に入ってくるのだ。先ほど脇を通過してきた駐車場は町営第三駐車場で、町営が三つとさらに中央駐車場の計四つの駐車場がある。

宿場の散策よりも先に食事処を決めようと歩き、榊形の跡、観光案内所、昔の郵便ポストが置かれた郵便資料館、本陣、脇本陣を通り過ぎたあたりでお蕎麦屋さんに決めた。ランチのメインメニューは蕎麦と五平餅のセットで、かけとざるがあり私は温かいかけ蕎麦を頼んだ。椅子に腰をおろしやれやれと話しをしていると直に「お待ちどうさま」と運ばれてきた。そばはふつう時間のかかるものと思っていたが、ここは事前に準備しておき客が来るとすぐに出せるようにしているようだ。たくさんのお客さんをこなすには当然のことだが、蕎麦といえどもこれが今風というものだろう。肝心のお味は特にどうということはないが、お腹もすいておりおいしかった。

妻籠宿本陣は藤村の母の実家

妻籠宿は慶長6年(1601)徳川家康により宿駅が定められ、江戸から42番目の宿場として整備されました。本陣1、脇本陣1、旅籠31、本陣は代々島崎氏が務めていました。島崎藤村の母の生家であり最後の当主は、藤村の実兄で馬籠から伯父のところへ養子にきた広介でした。本陣は明治になって取り壊されましたが、平成7年島崎家所蔵の江戸後期の絵図を基に復元されました。



妻籠の宿場風景

脇本陣は代々林氏が勤めてきました、庄屋・問屋を務めた家で、現在の建物は明治10年にそれまで禁制であった檜をふんだんに使って建てられたもので、そのすぐれた建築技術などが評価され平成13年に重要文化財に指定されました。島崎藤村の初恋の人「ふゆ」さんの嫁ぎ先でもあります。

帰りの電車の時間を考慮して本陣だけ見学しました。見学順路に従い最初に入るのは

鍵の手になった大きな土間で、かまど、流しがあり、そこから見える室内は荘厳といえる間取りの日本建築だ。囲炉裏もあり、台所・板の間があり部屋数は 14 の間がある。上段の間は床が少し高いだけで他と変わらないと思うのだが、特別の部屋ということだ。それと、湯殿と雪隠はそれぞれ 2 か所設けられている。ところで、なぜトイレを「せっちん」と呼んだのだろうか？ それと、玄関は殿様が雨にぬれずに家に入れるよう籠寄せがあって、籠から敷台に降りて直接家に入ることができる作りになっている。



本陣入口と内部

妻籠城跡と上久保の一里塚

13時20分本陣をあとにして南木曾駅に向かって最後の行程だ。少し行くと南木曾駅に向かう中山道と国道に出る道が分岐する。人出はここまでで5分も行くと高札場があってその付近には、中山道を行く旅人を監視する口止め番所というものがあった。そんな説明板がありその先に大きな岩が道沿いに現れた。その脇を抜けるように街道が続き民家も数軒ある。近づいて見ると「鯉岩」という、でもその形から鯉を想像するのは難しい。向かいの家は熊谷家住宅で町の有形文化財、19世紀初頭に建てられた長屋の一部とか。その隣には民宿が2軒あってそこから先に民家はない。人気のない山道を15分程行くと県史跡に指定されている「妻籠城跡」の碑があった、築城の時期は不明確だが天正12年(1584)小牧長久手の戦いの際、豊臣方についた木曾義昌の家臣山村甚兵衛が籠って家康配下の菅沼・保科らの軍勢を退けている。元和2年(1616)の一国一城令により廃城となった。位置的には国道19号と国道250号、それに中山道に囲まれた三角形のエリア内にある典型的な山城である。

さらに 10 分程進むと良寛歌碑がある、「木曾路にて この暮れの もの悲しきにわか
くさの 妻呼びたてて 小牡鹿鳴くも」と刻まれている。そのすぐ先にちょっとした小山
がある、「上久保の一里塚」で左側はさほどではないが、右側はかなり高い丘になって
いる。左の塚には大きなしだれ梅が植えられ、一里塚の石碑はかわいらしい小さなもの
だった。説明板もあり一里塚の基準は五間四方(約 9m)、高さ一丈(約 3m)で上に松や榎
を植えた。町内には十二兼・金知屋・上久保・下り谷の四か所に一里塚があったが、原
型をとどめているのはここだけである。江戸から数えて 78 里(312km)目の一里塚とあ
る。その一里塚から少し下り坂になる街道は、紅葉と緑のグラデーションがとても美し
かった。



妻籠城跡の碑



上久保の一里塚

かぶと観音と山の中の SL

一里塚から 10 分程行くと「かぶと観音」に突き当たる、そこは少し変形の交差点で説
明板とカーブミラーが立っている。背後には柿の木と他にも大きな木があり、少し色ず
いた周りには枯れ葉がたくさん落ちており秋ならではの景色だ。平安末期の源氏の武将
木曾義仲が平家打倒の呼び掛けに応じ、治承 4 年(1180)に挙兵して京都に向かう際、義
仲の兜の八幡座の観音像を祀ったのが起こりと伝えられている。境内には義仲が腰かけ
たと言う「腰かけ石」や弓を引くのにじゃまになるので、巴御前が袖を振って倒した「袖
振りの松」が残され、今は町の史跡に指定されている。参拝はせずに入力から見ると、
観音堂は入母屋造りで周りの紅葉と手前の石段には落ち葉がつもり、落ち着いた日本の
美しさが感じられた。

かぶと観音から 10 分も行くと、木曾川の流れと紅葉した山並みを望むところへ出た。

すると突然山の中に SL が現れた、SL 公園に到着したのだ。その少し先に JR 中央本線が走っている。SL はきれいに磨かれた D51 で、いつも手入れがされているようだった。



かぶと観音



木曾川の流れ

ここまで来ると南木曾駅は目前で、5 分後に予定通り 2 時 25 分南木曾駅に到着した。駅に到着して一安心、2 時 42 分の中津川行きに無事間に合った。もし、この電車に乗れないと次は 3 時 54 分の大阪行きの特急しかないのだ。朝の 8 時や午後 5 時の通勤時間帯を除けば、時間 1 本しか電車は運転されていないばかりか、10 時と 11 時代は 1 本も運転されていない。なのに、何故か特急が停車している。これはやはり妻籠・馬籠という観光地があるからに他ならず、観光資源が絶大な力を持っている証だろう。

中津川で快速に乗り換え、名古屋で区間快速に乗り換えて東浦に 5 時 16 分帰着した。